

巻頭言

「児童学科」半世紀に、保育の質向上を目指して

佐藤 益子\* 高木 徳子\*\* 村 榮 喜代子\*\*\*

A Half Century in the Department of Paidology  
— Toward the High Quality of Child Care —

京都女子大学家政学部児童学科は、京都女子大学開設の昭和24（1949）年以来、わが国における児童学科の先駆的役割を担ってきた実績がある。半世紀の歴史の中で、幼稚園教諭をはじめとする多くの教育者・研究者を社会に輩出してきた。平成12（2000）年度には、京都女子学園創始101年を機に、低年齢児ほか多様な保育の社会的ニーズに対応しうる保育士養成課程の設置を申請し、いち早く認可されている。30年余を児童学科と共に歩んできた佐藤益子、高木徳子、村榮喜代子の3教員が児童学科の保育士養成についての思いをまとめ、巻頭言とした。

本学保育士養成の黎明期は、昭和5年本派本願寺保母養成所に端を発し、昭和19年より京都保母養成所として、さらに昭和24年京都女子大学児童学科誕生以来30年余り、幼稚園教諭と共に保母資格も取得できた。その後、京都府における幼稚園教員の不足を充たすため、幼稚園教員養成に主力が注がれ、保育士資格は廃止された。

昭和32年10月には、当時の学長増山顕珠の悲願により、中川正文教授をリーダーとして児童学科、とりわけ児童文化の総力を結集した「子どもの劇場」が発足し、いまなお影絵の専門劇

団として、世界最大のスクリーンをもって全国レベルで活躍している（写真1）。

昭和39年12月には、こどものからだところをよりよい環境で育てることを目指して大学構内に「児童科学センター発達クリニック」が設置され、昭和63年まで小児科診療所・乳児観察室を開設して（写真2）、乳児（0～2歳）を対象に保育所兼小児保健・保育実習の場、さらには心理臨床教育の場として、児童学科の教育・研究、地域社会への貢献のみならず、わが国の女子大学教育のモデルとして寄与してきた。現在なおその設備を用いて、保育実習や高木徳子を中心とした障害児療育・臨床心理教育が続けられている。

昭和41年には、これらの実践的活動が大きく評価され、大学院修士課程として家政学研究科（児童学専攻）が本学で最初に設置された。以来国内外の研究交流の場として、当科は大きな役割を果たしている。

平成9年6月の児童福祉法等一部改正により、保育制度、保育所制度が大きく改められた。その結果、入所方式が従来の「保育に欠ける」乳幼児の措置から利用者の選択方式となった。保育所が自由に選択されるには、各園が利用者の要望に応えるべく、保育の体制を整え、多様な保育が展開される必要が生じる。保育の多様性は質の多様化でもある。

保育制度が公的な社会制度であることより、保育所情報の開示義務がうたわれ、客観的な評価基準・方法などの策定に、佐藤益子は研究協力者として参画した<sup>1)</sup>。この評価では主として、

\* 京都女子大学家政学部教授（児童保健学）

Masuko Sato, MD

\*\* 京都女子大学家政学部教授（児童心理学）

Noriko Takagi

\*\*\* 京都女子大学家政学部助教授（児童文化学）

Kiyoko Murae



写真 1



写真 2

保育所と保育士の専門性が問われる。すなわち、保育士は、従来の通所児の子育てと就労の両立支援のみならず、都市化・核家族化および地域の社会的連体制の希薄化による育児不安ひいては頻発する児童虐待の防止などにも対応し、さらに地域を越えての子育て家庭支援に対応できる高度の専門的知識と技能が必要とされる。このような社会的要請に応えるため、4年間の教育課程による保育士養成は今日の急務の課題であった。特に乳幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期である。京都女子大学児童学科は、設立当初より、当時の文部省が掲げる児童学の5領域中児童福祉学を除く児童心理学、児童保健学、児童文化学、児童教育学の研究領域に、専門教員の充実がはかられ、単に子どもの健全育成の理論のみならず前述のような実践教育が展開されていた。

これらの経緯と実績を踏まえ、低年齢児ほか多様な保育の社会的ニーズに対応し、少子高齢社会のわが国の次代を担う子どもを健全に育成する保育士を社会に送り出す使命があると考え、平成12(2000)年度に、児童学科の熱意と努力により、4年制保育士養成課程の設置認可を申請するに至った。

ここに、申請の概要を掲げ、平成16年3月に、児童学に関する広い理論と知識・技能を備えた指導的役割担う保育士を社会に送り出すエールとしたい。

### <児童学科保育士養成の目指すもの>

- ① 高度な専門的知識と技能を持った保育士のみならず、指導的役割を担う保育士を養成する。

京都女子大学では、平成12年度(2000年)に、現代社会学部を増設、これに合わせて既存学部の教育課程の見直しが行われた。児童学科における教育は、人間の原点である子どもを、心身の統一体として捉え、児童心理・児童保健・児童文化・児童教育の4領域を柱として、児童の心身の健全な育成は勿論のこと、人間に多面的にアプローチできる人材を輩出することを基本としている。

さらに、近年の社会環境の変化に、子どもの健全な成長が危機にさらされていることに対応するには、単に専門的知識のみならず、宗教教育を基礎とする人間性の育成が改めて問われている。本学ではすでに、建学の精神が機軸となった宗教教育が展開されている。

保育所に児童館や老人デイケア併設などの多機能化が求められる今日、児童福祉施設からの求人は増加し、多面的な関わりが可能である児童学科卒業生はすでに高い評価を得ている。しかし現状では、児童学科卒業後、保母として就職した場合、待遇としては、不本意ながら短期大学または高等専門学校卒と見なされてきた。高学歴化が進み、男女共同参画社会が具現化しつつある今日、大学卒の指導的役割を担う保育士の養成が必要と考え実施した。

- ② 低年齢児保育や病児保育に必要な知識と技能を備えた保育士を養成する。

保育保健学専門の教授らによる乳児保育の長期追跡研究を通じて、近年必要性が高まっている産休明け保育、乳児保育などに対する学生の理解と意欲が深まっている。実践の場としては、元発達クリニック乳児観察室における、ほふく室・沐浴室・子ども用トイレ・食堂・調理室をそのまま使用し、蘇生人形を用いた必修実習を行っている。

- ③ 障害児保育・統合保育に対応できる専門知識と技能を持つ保育士を養成する。

発達心理学専門の教授らによる障害児療育教室は、元発達クリニック時より通所している自閉症者の社会支援をはじめ障害乳幼児のトレーニングや地域の子育て支援に関わる教育・研究に貢献している。学生・大学院生は遊戯療法実習室における自閉症児・者をはじめとする障害児療育、教育相談に参加することにより、体験学習を重ねている。

- ④ 児童文化学の理論と優れた保育技能を持つ保育士を養成する。

児童文化専門の教授らによる児童文化学の理論を通して、児童文化財・児童文化活動の本質を見極め、創作絵本、影絵・玩具製作などの実習において理解を深め体得している。また、より優れた児童文化を子ども達に提供するための

実践活動を行ってきた「京都女子大子どもの劇場」は、年間1～2回の全国公演、数10回におよぶ保育所巡回公演により子どもに夢を育ててきた42年の実績がある。社会的活動としては児童文化施設「現代手づくり玩具館」を設立した村栄喜代子による地域の子ども達との玩具づくりの実践や、福祉施設指導員に対する実技研修などを通じ、保育技能の指導を実施してきた。

⑤ 子育て家庭の育児不安などに対応できるカウンセリングの理論と技能を備えた保育士を養成する。

学生はカウンセリング専門の教員による、カウンセリングの理論と実際を体験学習し、一般市民に対する公開講座「心の悩みを聴く体験学習ーカウンセリング実技講座ー」は例年盛況である。

⑥ 幼稚園教育要領との整合により、保育の多様化に対応できる保育士を養成する。

本児童学科の教育課程は、保育士指定科目に加えて教職科目を履修することにより幼稚園教諭一種免許を取得可能とするよう構成されており、これからの幼稚園併設保育園などの保育機能の多様化に対応できる。

⑦ 広い社会支援ができる保育士を養成する。

本学の基礎教育には、仏教学・言語コミュニケーション・情報コミュニケーション・スポーツ科学実習および総合教育科目（人権と共生社会・女性について考える・子どもを育てる環境・異文化交流）などが必修科目として開かれており、これからの保育士に求められる幅広い社会支援ができる人材が輩出できる。

### <卒業後の見通し>

現状においては、保育園や児童館からの児童学科卒業生の求人は、まだそれほど多くはないが、京都市版エンゼルプランとして「京都市児童育成計画」が10年間にわたり策定されており、低年齢児保育・時間延長保育・一時的保育・休日保育・障害児保育・乳幼児健康支援デイサー

ビスセンターや民間保育サービスなどへの需要が期待される。

### 児童学科の今後

京都女子大学はいま、平成16（2004）年度に向けて改組中である。平成12（2000）年度に現代社会学部が新設されたが、このたびの新学部設立は、「発達教育学部」である。家政学部児童学科と文学部教育学科が統合し、さらにより深く人間の本質を探究する子育て支援の専門家を養成することを目指して、鋭意設立準備中である。

超高齢化社会の到来とともに、少子化対策と次世代を担う子どもの健全育成は、いまやわが国の最重要課題となっている。とりわけ児童の問題行動に社会的関心が高まり、思春期の健康教育をはじめとする母性の育成や人生を決めるといわれる脳発達の著しい乳幼児期における成長・発達の知見を踏まえた人間育成および多角的・総合的かつ質の高い子育て支援に関わる教育・研究が、重要不可欠な現状である。そこで、心身の健全な発達と児童の所有する可能性を最大限に育成する人間形成的意義を探求し、人間に多面的にアプローチできる人材を輩出することが期待されている。これまでの保育士が国家資格となり、幼稚園教諭・小学校教諭免許と併せて取得可能とすることの必要性が今後さらに高まると思われる。「児童学科」の卒業生が、次世代の社会を担う子どもにとって何が最善であるかを見究め、有能な子育て支援の専門家として国内外で活躍することを期待したい。

半世紀の輝かしい歴史ある児童学科が、さらに飛躍的に発展することを期して止まない。

### 参 考 文 献

- 1) 佐藤益子他：保育所保育の評価基準・方法の策定事業 研究報告書 全国保母養成協議会 1999年3月